山梨県コンクール　三部　佳作賞

　祖母とまっ白いおにぎり

甲斐市立敷島中学校一年

　　　　　　　　　　　　　　　　浅川 菜央

　初夏の風を受けながら私は、清里の父の実家に向かう道すがら見る甲斐駒・八ヶ岳・四方の山々の美しさ、また、目先に広がる一面の田んぼ･･･稲田が行儀よく、正しく並び風に揺れている姿に見とれてしまいます。

　祖母の住む北杜市は、おいしい米どころで有名です。昔、田植えは、一つの祭りで、村の人達に手伝ってもらいながら、賑やかに田植えをしたものだと祖父はいいます。今は、機械化をして、人の手を多く借りなくても、一人で田植えができる便利な時代になったけど、その反面、農業をする人達も段々高齢化し、機械の操作も苦になり、米作りを諦めてしまう農家も増えてきているそうです。確かに、稲田の処々に、草の茂りをみます。

　祖父のおいしい米づくりの自慢の第一は、南アルプス・八ヶ岳・秩父山系の山々から流れ出すミネラルを含んだ北杜市の水にあるといいます。第二は、稲作に適した気候。季節風の影響が大きい内陸性気候が、米を育てているので、よい米の産地になっているのだといいます。

　私は、祖父の作るお米が大好きです。炊き立てのプーンと香るお米の匂い、ピカッと光るごはんに、いつも幸せを感じるひと時です。そんな時、私は、母方の祖母がおもしろく、なつかしそうに語った「まっ白いおにぎり」の話を思い出します。そして、一人で笑ったり涙ぐんだりしてしまいます。

　祖母の語る「まっ白いおにぎり」の話とは･･･

「一九四五年三月一〇日は東京大空襲のあった日です。私が三歳の時、私の家族は、東京の空も雲行きが怪しくなってきたので、いち早く父の生家のある甲府市に疎開しました。その時から田舎の不自由な生活が始まりました。田舎は安心かと思っていた私は、五才の時、甲府空襲を体験しました。田舎のどこの家庭も養蚕がさかんで、農家の生活は、豊かに見えました。

　私が小学生になった時、村の仲良しの友達の家族が、甲府城跡の広場でもようされている、サーカスを見に誘ってくれました。

広場は、大勢の人達で賑わっていました。私は、サーカスを初めて見る嬉しさと、母がにぎってくれたおにぎりを食べたい、うれしさで、気もそぞろでいました。お昼になりやっと、リュックを開く時がきました。開いた瞬間、友達のおにぎりと私の手にしているおにぎりとでは、どう見ても、色が違うのです。真っ白で大きな友達のおにぎりは、茶色ぽい色には、見えませんでした。私は「まっしろいおにぎりだぁ」と大きな声をだしてしまいました。私の驚く様子を見ていた友達のお母さんは「おにぎりの交換をしようね」と言って、にこにこしながら、私の手に大きな真っ白いおにぎりを載せてくれました。秋の日差しを受けて、私の手にあるおにぎりは、ピカピカに光っていました。私は、こんなに白いおにぎりがあるのかと、夢中でほおばりました。

　どう見ても真っ白にみえない茶色がかったおにぎりは、お米の中に、親指の爪にちかいくらいの真ん中にすじが入った麦がまざっているからだと母から聞きました。」・・・・

　あの時代から何年もの年月が過ぎた今でも、「まっ白いおにぎり」の白さと、夢中でほおばったおにぎりの味は、忘れられないと祖母は言います。

　今、麦ごはんを食べている家庭は、多いと思います。ただ麦の大きさは、昔より随分小さくなったようです。私は、祖母の語る大きな麦の入ったご飯を食べてみたいと思います。

　段々と祖父の高齢化も心配になります。大きな機械を使った米づくりも心配です。いつまでも、我家自慢のおいしいお米を作ってほしいと思います。

　秋のみのりの日が楽しみです。